

III 水軍と城跡

1 中世の城

「城」。この言葉は、現代を生きる我々にとって壮麗な大櫓（天守）と反り立つ石垣に象徴される近世城郭をイメージさせます。しかし、近世城郭は、長い歴史を持つ日本の城では最も遅く登場したものであり、完成形態と言うべきものです。郭や建物配置の計画性、防御機能、外部に対する象徴性と威圧度、軍事拠点とは思えない均整のとれた美しさは、近世以前の城とは比べものになりません。

日本の歴史の中で、「城」はいつ頃登場したのでしょうか。「城」は、防御を第一の目的としたものです。人間は世の中が緊張状態に入ると、敵の攻撃を防ぐためにこの施設を作ってきました。古くは、弥生時代の環濠集落、古代の城や柵あるいは都城、中世の領主の居館や山城、砦、さらには環濠で囲まれた寺内町、そして江戸時代末期において異国船を打ち払うため各地に築かれた砲台なども、広義の「城」に含まれる防御施設です。このような場所は、防御拠点であると同時に戦闘拠点でもあり、その他、支配拠点や集会所などとしても使用され、実に様々な役割を持った場所でした。

「城」と呼ばれるものの大半は、戦国時代から安土桃山時代を経て、江戸時代初期までの半世紀ほどの間に築かれた山城であり、その数は4万ヶ所を超えていると言われています。この数は、死と隣り合わせの日常という戦乱の世の実情を反映したものとなっています。しかし、豊臣秀吉が天下を統一して戦国の世を終らせると、天正19年（1591）山城停止令を発して、山城の築造を禁止させました。また、豊臣秀吉の没後の慶長20年（1615）に起こった大阪夏の陣の直後には、徳川幕府が一国一城令を発したため、その数は約170城まで激減しました。その後は、城の新築はもとより増改築さえも幕府の許可なしには一切できなくなりました。尾道市の周辺も多くの城跡が確認されています。丘陵部、沿岸部、島嶼部など、多様な地形により構成される尾道市には、現在までに85ヶ所の城跡が存在しています。しかし、その存在はほとんど知られていません。なぜなら、城跡は、長い年月の経過によって木々に覆われ、自然の山へと帰っていくからです。江戸時代の俳人である松尾芭蕉が“奥の細道”の中で「夏草や兵どもが夢の跡」と詠んでいる情景は、まさに中世において栄華を夢見て戦った兵どもと彼等が築いた山城の虚しさを伝えています。忘れ去られたものが多い城跡ですが、有力者が築いたものである以上、その動向をよく示すものであり、地域の歴史に密接に関係する重要な歴史遺産です。

2 城の構造

中世城館の移り変わり

平安末期から鎌倉初期にかけて、有力者の居館は、方形区画の堀を巡らせるようになり、複数の郭を配置して、各郭で機能を分担する、いわゆる「城館」が成立します。

南北朝時代では、鎌倉幕府の権力の弱体化に伴って武士団が独立しました。武士団は、他の勢力からの攻撃を防ぐため、山上に臨時的な軍事施設である山城を築きました。山城は、自然地形自体が防衛の役割を持ち、要所に人工の防御施設（堀・土塁・柵・塀）を作るだけで城としての機能を十分に果たしました。また、山上は平地よりも視野が開けているため、敵の進攻を察知しやすく、少人数でも守りやすいなどの利点がありました。

戦国時代前期では、本来は非常であったはずの戦が日常化したため、山城の各防御施設の工夫が進み、長期の籠城（ろうじょう）に備えて郭を広くするなどの発展が見られました。しかし、戦国時代後期になると、有力者は領国経営のために交通の便が良く、城下町の支配が行いやすい小高い山の上に城を築くようになります。この城は平山城と呼ばれます。そして、鉄砲の伝来と普及によって攻撃射程が拡大したことや領国経営の効率化などの理由から、次第に平地に城を築くようになりました。この城を平城と言います。

城のしかけ

中世の城には、土を切り盛りするだけの単純なしかけが各要所に作られました。城という字が「土」と「成」から構成されるゆえんともなっています。

ほりきり 堀切

山城は、尾根上に築かれることが多く、そのため、丘陵の尾根を分断する堀切は、敵の侵入を途絶えさせ、進攻を遅らせる目的でつくられました。少数で守る側が多勢で攻めてくる敵を迎え撃つために必要不可欠な防御施設です。



どるい 土塁

敵の侵入を防ぐため、城や豪族の住居などの周囲に築かれた土盛りです。堀を掘った土で作られることが多く、堀の深さと土塁の高さで容易に越えることができません。土居、土手ともいわれます。堀切と並んで山城などに見られる一般的な防御施設です。



たてぼり 豎堀

山の斜面に縦につくられ、敵の斜面の横移動を封じるための堀です。攻め手は、堀切のために道が途絶えた場合、山の斜面を行かなければなりません。守り手は、その山の斜面にも豎堀を設け、進攻が停滞したスキを見計らって反撃を加えていました。



うねじょうたてぼりぐん 畝状豎堀群

豎堀を密集させて山の斜面に並べたものです。攻め手の横方向への動きをほぼ完全に封じます。攻め手は、歩きやすい堀の底を縦一列になって登るしか進む道はなく、かっこうの標的となりました。



3 尾道の主な城跡

尾道には、現在までに 85 ヶ所もの城跡が確認されています。これらは鎌倉、南北朝、室町、戦国と各時代において必要に応じて築かれ、短い期間で幕を閉じる城もあれば、改修・強化により長きにわたって戦略的な拠点であり続けた城もありました。

御調

丸山城跡 丸山城跡は、戦国の世の明応年間、三次地方の豪族三吉氏が御調町周辺まで勢力を伸ばした時、その家臣である上里氏が城主として入ったとされている。上里氏は、同三吉氏家臣である雲雀城主の池上氏や牛の皮城主の森光（守光）氏と行動を共にしたとされ、山陰地方の戦国大名・尼子晴久に従って、旧主の三吉氏を攻撃したとも伝えらる。

詳細は不明だが、天正 18 年（1590）に落城している。



雲雀城跡 雲雀城跡は、雲雀山に築かれた城で、御調町域の主要通路を含む地域を見渡すことができる。山頂の削平地に主郭が存在し、その南西に深さ約 14m、幅約 3mの堀切を配して、主郭と尾根道を分断している。主郭の東側や北側にはいくつかの郭が段状に配置され、これらの方向からの攻撃を意識していたことがわかる。竪堀や土塁、井戸跡なども確認されている。



尾道

鳴滝山城跡 鳴滝山城跡は、尾道水道の西口を見下ろす鳴滝山の頂上に築かれている。鎌倉時代末期に築城されたといわれ、室町時代には宮地氏が小串山城跡、太夫殿城跡、七曲城跡などの支城と連携しながら周辺海域の水運を掌握したとみられる。応永 30 年（1423）、宮地恒躬の代に対立していた大平山城主・木頃経兼の攻撃を受け、当城は落城し、恒躬も戦死している。この時、その子の明光が因島村上氏を頼り、因島に移ったと伝えられている。



千光寺城跡 千光寺城跡は、尾道のまちを見下ろす千光寺山の頂上に築かれた。当城は、天正年間に木梨杉原氏の七代元恒により築城されたと伝えられる。一方、『善勝寺文書』によれば、元恒の父元清（隆盛）が千光寺城主と記されており、永禄年間には築城されていたとも考えられている。瀬戸内有数の港町尾道を支配する絶好の場所に位置していたが、天正19年（1591）、豊臣秀吉による山城停止令のため廃城となっている。



家ノ城跡 家ノ城跡は、木梨杉原氏の本城である鷲尾山城跡のふもとの小高い丘の上に築かれている。言い伝えでは、杉原為平が築城したといわれる。当城は、頂部郭と北西尾根を中心に発掘調査が実施され、建物跡をはじめ多くの遺構や遺物が出土している。銅製懸仏（かけぼとけ）と銅銭6枚等が出土した土坑もある。郭の北西側に位置する幅6～8m、深さ約2mの堀切は、全体を掘り切るのではなく、中央部を土橋状に高く残し、通路として使用していたようである。



松尾山城跡 松尾山城跡は、港町尾道への東側からの進入口である坊地峠にさしかかる道を見下ろす松尾山に築かれた城である。当城周辺の太田地区は、南北朝時代、足利尊氏に従軍した杉原兄弟が戦功により与えられた土地のひとつである。その後、兄弟は木ノ庄木梨と高須を各々で支配する形を取り、やがて木梨杉原と高須杉原へと分家した。松尾山城跡は高須杉原氏が居城し、戦国時代、木梨杉原家が尼子方、高須杉原家が毛利方につき従い、一族の命運を分けている。



岡島城跡 尾道水道に浮かぶ岡島（宇賀島）に築城され、元は宇賀島衆と呼ばれる海賊らが根拠地としていたとされる。宇賀島衆は、周辺海域で航行船舶から礼銭、関料を徴収していたようである。その様子は、『老松堂日本行録』や『梅林守龍周防下向日記』などに記されている。しかし天文23年（1554）頃、海賊衆・因島村上氏と結んだ小早川氏によって滅ぼされている。その後、岡島城には向島経営に乗り出した因島村上氏の支城とされたようである。

余崎城跡 余崎城跡は、向島南部の半島状に突き出た観音岬に築城され、「芸藩通志」によれば村上吉充の居城といわれる。弘治元年（1555）の厳島合戦により向島を得た因島村上氏が、当城を向島経営の拠点としていたのではないかと考えられている。しかし、村上吉充の在城は短く、永禄10年（1567）には因島の青木城に本拠を移している。以後、余崎城跡には、村上氏の武将・宮地大炊助明光の次男鳥居（島居）次郎資長が居城したといわれる。



因島

青陰城跡 青陰城跡は、因島のほぼ中央部、風呂山と龍王山に挟まれた青影山頂に立地する。この城は、鎌倉時代末期から南北朝時代初期頃に活躍した村上義弘が南朝勢力として居城したという伝承がある。戦国時代においては、村上氏が大名の性格を帯びはじめると本拠城としての役割を果たしたとされる。後、村上水軍の第一家老救井太郎左衛門尉義親の居城と云う。元弘年間から慶長元年、10代目の村上吉亮が生涯を終えるまで約260年間本拠地としてあり続けた。



馬神城跡 馬神城跡は、因島の北西部に存在する城跡で、因島村上氏が第三の本拠とした青木城とは約1km離れた場所にある。当城は、海に面して広い海域を見渡すことができるため、海上を航行する船を監視する目的で築城されたのではないかと考えられる。山頂部の郭とその一段下の郭は広い平坦面を有しており、良好に遺存している。また、北側麓の岩礁（がんしゅう）には、栈橋（さんばし）の柱穴跡である「岩礁ピット」が存在するとも言われている。



青木城跡 青木城跡は因島の北西部に位置し、港町尾道の西口を押さえる場所にある。城跡周辺は埋め立てられ、陸地となっているが、当時は海に囲まれていたと考えられる。標高50mの竜王山の頂上を中心に、尾根上に複雑な郭が設けられている。本城跡は、村上新蔵人吉充が永禄10年（1567）に向島の余崎城から移り、慶長5年（1600）に青陰城に移るまでの居城であったと伝えられている。



美可崎城跡 美可崎城跡は、三ヶ崎の先端部に位置し、宝亀2年（771）安芸国の中部瀬戸を守る海の関所が置かれたと伝えられる。室町時代は、因島村上氏が金山氏を奉行として置き、備後灘に行く船から運航税を徴収していたようである。主郭の北東に二の郭を構え、周辺は急斜面により、海に面しています。岬の南側にある入江が「舟隠し」ともいわれる。半島の先端には、金山氏にまつわる伝説を持った地藏石（鼻の地藏）が地域の信仰をあつめている。



一ノ城跡 一ノ城跡は三庄湾の北、奥山の尾根の鶴ヶ峰を中心に最上部から東に向かって2段の郭があり、一方北東に向かって7段の郭が一列に並ぶといった縄張りとなっている。その中の郭の一



部に堀切を明瞭に確認することができる。当城跡は、平安時代末期の源平合戦の時、家方がこもったと城とも言われる。また、小早川氏の居城とも伝えられ、北側の棕浦には土居屋敷（城見屋敷）や小早川氏の墓と伝えられる五輪塔数基が現在も残っている。

茶臼山城跡 茶臼山城跡には、主郭の南西側および南に郭が確認できる。また、南西辺には帯郭も認められる。北と東側に段状地があり、東側山麓に屋敷跡があると伝えられている。南北朝時代に大鳥伊予守義直が居城したといわれ、頂上には茶臼山城主の碑が建てられている。当城跡は、海に面しておらず、因島の中央部にあり、街道を見張る山城であったと考えられる。



生口島

茶臼山城跡 茶臼山城跡は、生口島を南北に二分する山々のうち、観音山の一丘陵頂部に築かれている。主郭の北東側と南西側にそれぞれ郭が確認されている。全体的に小規模な縄張りとなっています。南北朝時代では、南朝方が拠ったとされ、康永元（1342）年に小早川氏に落とされている。『芸藩通志』には戦国期の海賊衆・生口孫三郎景守の城とされており、俵崎城や瀬戸田の町並みや港を望む詰城の機能が考えられている。



4 発掘された中世城館

「城は支配者が合戦や支配のために築くもの」との見方が一般的です。しかし、発掘調査の成果によって、山城にも様々な形態が存在し、それぞれが役割を持って機能していたことが分かっています。その性格の違いを見分ける材料は、立地、地形と防御施設の組み合わせによる防御力の高さ、生活の痕跡から判断される城の機能した期間などがあります。尾道市で発掘調査された城跡は、牛の皮城跡、末近城跡、丸山城跡、俵崎城跡の4城跡があります。

牛の皮城跡（尾道市御調町大町） 牛の皮城跡は、御調川を臨む険しい丘陵に築かれた山城です。北郭群と南郭群から成り、畝状堅堀と堀切によりほぼ全方向への攻撃に対応しています。城主は、戦国時代後期の人、森光新四郎景近と伝わっています。

牛の皮城跡は、南郭群（標高 230m付近）と北郭群（標高 150m付近）で構成され、天然の要害の地に防御施設を多く配置する堅固なつくりの城となっています。発掘調査が実施された北郭群は、5つの郭を尾根に沿って段々に築き、東側と北西側に多くの畝状堅堀群を配置して防備を高めています。南西側に見られる二重の堀切は、南郭群への進攻を妨げるために道を分断しています。各郭において建物の痕跡は確認されていませんが、鉄釘が多く出土していることから何らかの簡易な建物が存在した可能性があります。北郭群高所の1～3郭では、15世紀末から16世紀前半の土師質土器皿や輸入陶磁器などの食器類をはじめとする生活道具が多く出土しており、生活の主要区画であったと考えられています。また、低い地点の4・5郭では生活用具は少なく、周囲の畝状堅堀群と土塁によって下方の攻撃に備える区画であったようです。

南郭群は発掘調査が行われていませんが、畝状堅堀を西側、南側、東側に配置しており、北方に防御施設が見られないことから、北郭群にその役割を負わせ、南と北の郭が連携することでほぼ全方向からの城攻めに対応していたものと考えられます。



写真 牛の皮城全景



写真 発掘調査写真①



写真 発掘調査写真②

末近城跡（尾道市御調町植野） 末近城跡は、野間川を望む低い丘陵上に築かれた山城です。野間川沿いの交通の要衝を押さえ、野間・植野の境を見渡す場所に築かれた軍事的機能の低い「村の城」と考えられています。

末近城跡は、丘陵頂部が方形状に造成されて主郭を成し、北西側と南東側に伸びる長細い平坦面も城の一部（帯郭）である可能性があります。そして、主郭から北西側の帯郭への途中には薬研彫状の堀切が存在しています。南西側の帯郭にも防御用施設が存在する可能性はありますが、いずれにせよ小規模な城跡です。発掘調査は主郭を中心として調査が実施され、主として掘立柱建物跡と近世の墓壇（墓穴）が多く検出されました。城跡にともなう遺物はわずかししか出土していません。末近城跡は、戦国期の末近氏の居城と伝わります。しかし、小規模で軍事的な機能は低く、生活痕の乏しい様子からは領主の支配拠点を想定することができません。また、近世墓壇の存在から戦国期には城の機能が停止し、その後、墓地として利用していたことが明らかになっています。このような場所は、非常時の避難場所、または集会所などに広く利用された特別な空間、いわゆる「村の城」と考えられています。



写真 末近城跡全景



写真 発掘調査写真

丸山城跡（尾道市向島町） 丸山城跡は、向島東部の沿岸に伸びる低丘陵を利用して築かれた山城です。当城跡は、向島経営に乗り出した因島村上氏の支城と思われ、本拠の城である余崎城跡と連動し、海上の監視と通信の役割を担っていたと考えられる「海城」です。

丘陵の頂部は開けた平坦地となっており、城の中心部となる主郭と考えられます。主郭の海側（東側）は道路建設によって削られているため、もう少し規模の大きな主郭であったと考えられています。そして、主郭の南側から西側にかけて帯郭が取り付いています。城跡が立地する低丘陵は、西側の丘陵部へとつながりますが、堀切によって分断しています。

主郭上からは、建物の柱穴跡と考えられる遺構が確認されていますが、簡易な建物と推測されます。出土遺物もさほど多くはありませんが、15世紀後半から16世紀前半までのものが確認されており、一定の期間生活を行っていたことがわかります。

因島村上氏は、内海権をめぐる毛利氏と陶氏が争った元治元年（1555）の厳島の戦いで毛利方として活躍しました。その戦功として小歌島を含む向島一円を領有するようになり、因島の長崎城から向島の余崎城へと移りました。丸山城跡は、海に面した場所に築かれていることから、海上の監視と通信の役割を担っていた可能性の高い城跡です。俵崎城跡（尾道市瀬戸田町瀬戸田） 俵崎城跡は、生口島の北西部にあって、佐木島・高根島に挟まれた水道のほか、

三原湾、因島を見渡すことのできる眺望の良い低丘陵に築かれた山城です。当城跡は、沼田小早川氏の庶流の一族・生口氏の館城的な性格を持った山城と考えられ、瀬戸田の町と港湾の監視・警護活動の拠点であった可能性が考えられます。

当城跡は、標高約 30m の最頂部を主郭として、北側から南東側にかけて 3 つの郭が存在しています。主郭西側の下方には堀切、北西側には畝状に並ぶ 2 条の堅堀が配置されています。出土遺物は、14 世紀後半から 16 世紀後半までの土師質土器のほか、輸入陶磁器、備前焼の甕、肥前系の陶磁器など多くの生活用具が見られます。城としての機能を高めたのは、土器の出土量や遺構の内容から 16 世紀前半以降と考えられています。この頃、主郭には礎石建物が建てられ、柵または塀の巡る土塁や堀切、堅堀が構築されていることから、長期にわたる拠点として整備されたことがわかります。低い山に立地すること、比較的広い郭を持つこと、防御施設をよく整え、建物を置いていることなどから、当城は館と城の両方の性格をあわせ持った城として機能していたのではないかと考えられます。そして、詰めの山城としての性格が強い茶臼山城跡と連動して生口島北部を支配していたと思われる。



写真 俵崎城跡全景



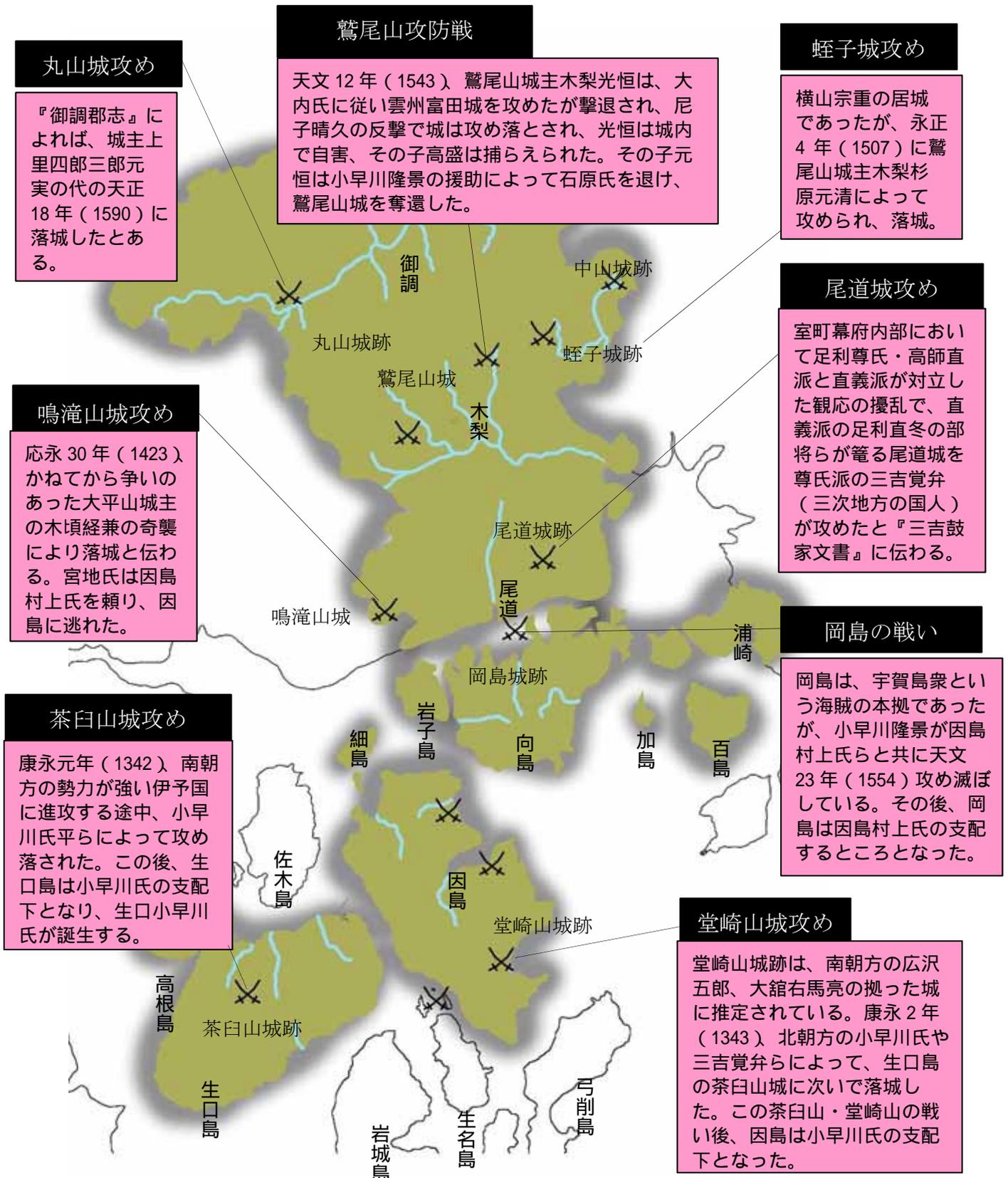
写真 発掘調査写真

この発掘調査によって、伝承の不確かな内容に迫り、それを覆す成果を得られたことは、地域社会の歴史の正確な理解につながる一步となっています。

俵崎城跡の壁土と瓦 俵崎城跡の一郭で検出された建物跡 (SB1) は、周辺に火を受けた自然石や炭化物、焼け固まった土などが確認され、建物の壁面と考えられる赤く変色した壁土が出土しました。このことから火災に遭った建物と考えられました。壁土には、木舞竹 (こまいたけ、壁の下地として縦横に組んだもの) や木舞を結んだひもの痕が見られます。この壁土と共に、火を受けた軒丸瓦や平瓦も出土したことから建物には瓦が葺かれていたことが推測されました。この建物は、倉庫と考えることもできますが、1 郭の中でも海上の見通しが良い位置に造られていることや、西側斜面からの攻撃に対して側面から防御できる位置にあることから、見張りや防御に関わる建物跡の可能性も考えられます。中世の城跡には様々な形態が見られますが、大規模な城や館を除いて、建物が多くの建てられることはなく、瓦葺きの建物にいたってはほとんど確認されることはありません。瓦は、当時では富の象徴でもありましたし、瓦が葺かれるような頑丈な建物を当城跡のような小規模城に建てることは珍しく、特異な事例と言えます。

5 城をめぐる戦い

現在、山城は何事も無かったかのように自然の山の姿を見せています。しかし、これら山城の中には、壮絶な戦いの歴史を秘めたものも数多く存在します。伝承や文献史料による推定によって、尾道周辺でも城をめぐる戦いが行われていたことが分かっています。



6 海賊衆と海城

芸予諸島は古代より海賊行為が行われ、中世には海賊衆でありながらも国家的また慣習的に認められた集団が存在していました。瀬戸内海を東西に行き来するためには、必ず芸予諸島を通らなくてはなりません。つまり、物資を載せた船が自ら網に飛び込んで来る芸予諸島は、海賊の発生と活動の最も適した場所だったのです。

芸予諸島において最も有名な海賊衆は、主に戦国時代で村上水軍として活躍した能島、因島、来島の三島村上氏です。これら三家は、拠点となる城の立地のよさもあり、瀬戸内海で大いに勢力を振るっていました。

その他、芸予諸島周辺には、宇賀島衆（尾道）、生口氏（瀬戸田）、内海衆（呉市安浦町内海）、蒲刈多賀谷氏（蒲刈島）、倉橋多賀谷氏（倉橋島）、呉衆（呉市）、野間氏（広島市安芸区矢野）、厳島神主家神領衆（廿日市市）などの海賊衆・警固衆がおり、それぞれが制海権を手中にしようとせめぎ合い、時には戦国大名などの家臣団に組み込まれて戦いを行うこともありました。

戦国時代における水軍力は、戦国大名にとって軍事、兵・物資輸送の観点から、ぜひとも手元に置きたい力であったため、積極的に家臣に組み込もうとする働きかけが見られました。沼田に本拠を置く小早川氏は、芸予諸島の航行管理と水軍を手に入れるため、因島村上氏と関係を強め、その所領の安堵などにより、因島村上氏の水軍を小早川水軍とともに、毛利氏の勢力の中に組み込むことに成功しました。これにより、毛利氏は有力な水軍を手に入れ、大内氏や近畿地方の勢力との戦いを有利に進めたのです。

こうした海賊衆は、それぞれ拠点となる城を持っていました。それが、海城です。



船かくしと考えられる入り江



青陰城跡から島々を望む

海城とは、水軍力を持った海賊衆などの海上勢力が築いた城で、山城と同様に城郭を構えています。棧橋・岩礁ピット・船だまり（船の潮待ち、風よけのための停泊地）・水場（給水施設）などの施設が設けられ、海と潮流が堀と土塁の役割を果たした独特の城を指します。海城には、島を丸ごと城塞化するもの（能島城跡：愛媛県今治市）、岬に築かれ船の航行を監視するもの（美可崎城跡・丸山城跡）があり、これらの城は海上交通の要衝に立地して「海の関所」として存在し、船を見つけては関料や礼銭を受け取り、従わない者は海に沈めていました。因島村上氏の本拠となった因島や向島にも、海城の機能を持っていたと考えられる城跡が残っています。長崎城跡、美可崎城跡、丸山城跡、余崎城跡、岡島城跡などがこれに当るものと考えられます。